

学生による講義評価に関する基礎調査の報告

～新潟大学教育学部における調査結果より～

柴山 直¹・斎藤 大輔²・南風原朝和³

この論文では、新潟大学教育学部の学生と教員に対して行った学生による講義評価に関する調査結果を報告する。まず、学生からみた講義評価項目の重要度判定の4つの視点を明らかにした後、各視点別に重要とされた項目を指摘する。次に学生の自由記述の分析を試み、さらに、学生と教員とで重要度が異なる項目をとりあげ、講義評価に関する両者の認識の異同を考察する。最後に、教員から得られた講義評価に対する自由記述の内容を整理する。

高度情報社会における有意な人材を育成するための機関としての大学の主たる目的のひとつに、最新の専門知識を体系的に学生に教授することが挙げられる。この目的を果たすために、大学教員にはその分野に関する深い理解と造詣が求められることは言うまでもない。しかし、専門知識を教授される側の学生の立場からみたとき、研究者として優れた大学教員が必ずしも専門知識を順序立てて分かりやすく伝達できる教授者であるとは限らない。1987年の臨時教育審議会の答申（臨時教育審議会（1987））にはじまるわが国の大学改革の一つの課題として、大学における教授技術改善の試み（たとえば片岡他（1989））が浮上してきたのもこの理由による。

このように大学における教授技術の向上・わけでも多数の学生に効率よく専門知識を伝えていくための講義技術の改善は急務であるにもかかわらず、その進捗ははかばかしいとは言えない。技術論的にみて、この原因のひとつとして、

講義技術の良否を客観的に評価するための尺度が整備されていないことが指摘できる。もちろんこれまでそうした尺度の構成についての試みが存在しなかったわけではない（たとえば織田（1983、1984）、片岡他（1989））。しかし、その評価方式のほとんどは、講義を評価する立場にある学生が評価される立場にある教師や大学から一方的に質問項目を与えられるという、学生にとっては受け身のものとなっている。このため実際に講義を受け、その講義を評価する立場にある学生たちが重要と考える項目が取り上げられなかったり、逆に、学生にとってさほど重要でないものが過度に強調されている可能性も存在すると考えられる。

そこで本報告では、講義評価については長い歴史を持つアメリカの大学で採用されたり、あるいは日本で試行されている講義評価に関する様々な項目をとりあげ、大学生がそれらの項目をどのような視点からどの程度重要視しているのかを調査分析し、また大学教師についても同様の調査を行い、学生との認識の違いを調べる。さらに両者に対する自由記述式のアンケートによって得られた資料の内容に関しても分析を試みることを目的とする。なお、調査の性質上その対象は新潟大学教育学部に所属する学生及び教員に限定したことに注意されたい。

¹新潟大学教育学部

この研究調査をまとめるにあたっては、文部省より平成6年度カリキュラム改革調査研究経費（プロジェクト名称：学生評価にもとづく大学講義技術改善支援システムの開発（代表：柴山直））の援助を受けました。

²新潟市立養護学校

³東京大学教育学部

1 調査手続

1.1 調査対象

新潟大学教育学部の学生計247名（1年生25名、2年生126名、3年生94名、4年生2名）及び、新潟大学教育学部教員123名中調査に回答のあった26名（回収率21%）を調査対象とした。

1.2 調査用紙

この調査で用いた質問紙は主として 1) 講義評価に関する36個の項目と 2) 講義評価に関する意見等を自由に記述してもらう部分とから構成されている。このうち講義評価に関する36個の詳細は表1を参照されたい。これらの項目は織田(1984)、Burdsal & Bardo(1986)、阿部(1987)が作成した講義評価項目の中から大学における講義ができるだけ多面的に評価できるように選びだしたものである。また、各項目ともその重要度を「1：全く重要でない」から「6：とても重要である」の6件法で評定させるものである。

学生に対しては、36項目の後に「これ以外に、大学の講義にとって重要と思われるものがあれば以下の余白に記入してください」という自由記述による質問を行った。また、教員に対しては、「1) 大学の講義評価に関する意見を記入して下さい」、「2) いまの大学生の学習態度についての感想を記入して下さい」、「3) いまの大学教師の講義への取り組み方や学生に対する態度についての感想を記入して下さい」、「4) 大学の講義にとって重要と思うものがあれば記入して下さい」の記述形式による質問を行った。これ以外の質問も設けたがスペースの関係上その分析は本報告では割愛する。

1.3 実施

学生に関しては1993年11月に新潟大学で開講されている4つの講義時間中に実施し、教員には同じ時期に新潟大学教育学部各教員宛てに調査用紙を配布し、2週間以内に返却してもらうことによって調査を行った。

2 調査結果

2.1 講義評価項目の重要度判定に関する分析結果

2.1.1 学生からみた重要度判定の視点

学生達がどのような視点から講義を評価しようとしているのかを明らかにすることは、より良い講義を行うための情報を得るという意味で重要である。ここでは学生に関するデータに対して因子分析を行うことで、学生達の講義評価の視点を浮き彫りにしておく。分析の手順は以下のとおりであった。まずデータから36個の項目間の積率相関係数行列を求めた。次にSMCによる共通性の推定を行った後、主因子解を得た。そして固有値の大きさから判断して因子数を4とした。これら4個の因子をバリマックス回転したものを最終的な解とした。それが表2に示す結果である。それぞれの因子の意味が解釈しやすいように、因子ごとに因子負荷量の大きなもの順に項目を並べ換えてある。また因子分析のアルゴリズムとしてはSAS/FACITORを利用した。

表2の因子分析の結果より読み取れる学生達の講義評価の視点としては、1) 講義の構成技術の良否、2) 理解しやすさへの配慮の度合い、3) 外的情報による判断、4) 学生への影響度の4つが指摘できる。それぞれの解釈を詳述すると次のようになる。まず、第I因子に特徴的な項目として、「23. 文献資料の紹介(項目内容は略記：以下同じ)」、「25. 他講義との関連」、「35. 効果的な話し方」などが挙げられることから、いわば講義を組み立てる技術の適否に関する点からの評価を学生達が行っていることがうかがえる。次に第II因子では、「13. 適切で理解しやすい教材」、「33. 学生の学力にあわせた講義」、「18. 前の講義との明確なつながり」などの項目が高い因子負荷量を持っていることから、講義内容が理解されやすいようにどの程度学生に対して配慮しているかの視点の存在が指摘できであろう。同様に第III因子としては、「4. 評判の良い講義」、「27. 教師の知名度」など講義の中味

項目番号	内 容
1	試験以外にも、レポートや日常点などいろいろな角度から成績をつける。
2	講義を受けて、その分野をさらに学びたいという気持ちにさせられる。
3	愉快的雑談（脱線）がある。
4	学生の間で評判が良い講義である。
5	学生の持つ学問的な知識や常識を覆すインパクトがある。
6	宿題やレポートには建設的で有効なコメントを加えて返却する。
7	講義題目表に記されている内容と実際の講義内容とが一致している。
8	クラスの人数を考慮に入れた講義方法である。
9	教師に学生から学ぶ態度がある。
10	講義に学生主体の討論や作業が含まれている。
11	教師自身の意見や主義主張を述べる。
12	学生個人の問題意識に理解があり、学生の興味・関心を引く具体例を多く示す。
13	教材の量が適切で理解しやすい形に準備してある。
14	教師が単位認定の方法や基準を明確にする。
15	学生の人生観を変えさせるようなインパクトがある。
16	学生に対する態度が親しみやすく、丁寧で、自由な発言や質問を認める。
17	担当講義について最新の学問的知識を完全な形で提供する。
18	前回の講義内容とのつながりが明快である。
19	教師の年齢や教育歴、服装などの外見が良い印象を与える。
20	時間配分を考慮し、しっかりとした構成の講義である。
21	レポートの課題を出す際には、学生が履修した講義を考慮している。
22	講義内容が学生の実生活や将来に深く関わっている。
23	講義の範囲はもちろん、範囲外であっても、価値の高い文献や資料を紹介する。
24	講義を受けることによって、その分野について理解が深まる。
25	講義内容は他の講義との関連が考慮されている。
26	講義外であっても学生との接触につとめる。
27	研究業績、著作物、テレビへの出演などによって教師の知名度が高い。
28	講義が聞き取りやすく、ノートもとりやすい。
29	教室の室温や換気を考慮する。
30	講義内容の意義や講義の目的、学習法を明確にする。
31	教師が講義に熱意を持っており休講も少ない。
32	出欠を取らなくても講義に出席している学生が多い。
33	講義内容の難易度や講義のペースを学生の学力に合わせている。
34	学生の私語、居眠り、遅刻に対して厳しい。
35	身振り手振りを効果的な活用した話し方をする。
36	図表や印刷物などを使っていろいろな角度から説明する。

表1：講義評価項目の一覧

番号	内容 (略記)	I	II	III	IV	共通性
23	文献資料の紹介	.63	.03	.00	.20	.44
31	熱意有り休講少ない	.59	.05	-.07	.12	.39
25	他講義との関連	.56	.25	.16	.03	.40
10	学生主体の討論	.53	.02	-.05	.28	.36
36	多角度からの説明	.53	.14	.05	.02	.30
26	学生との講義外接触	.52	.00	.29	.12	.37
35	効果的な話し方	.46	.04	.20	.02	.26
7	題目内容と実際内容との一致	.34	.30	.07	.15	.23
34	私語・居眠り・遅刻に厳しい	.33	.24	-.06	-.06	.17
11	教師の主義主張を述べる	.31	-.25	.04	.19	.20
17	最新の学問的知識の提供	.31	.27	.22	.13	.23
20	時間配分を考慮	.29	.27	.26	-.09	.23
13	適切で理解しやすい教材	-.04	.60	.19	.31	.49
33	学生の学力にあわせた講義	.16	.57	.09	.16	.38
21	履修済み講義を配慮	.11	.53	.13	-.04	.31
18	前の講義との明確なつながり	.25	.51	.18	.06	.36
28	聞きやすくノート取りやすい	-.07	.47	.40	.12	.40
14	単位認定の明確な方法・基準	-.16	.45	.23	.02	.28
12	学生の興味を引く具体例	.18	.40	.13	.31	.30
30	明確な講義目的	.34	.39	.22	.17	.34
8	クラスの人数を考慮	.24	.27	-.07	.24	.19
1	いろいろな角度からの成績	.12	.22	-.15	-.12	.10
4	評判の良い講義	-.01	.14	.59	.05	.37
27	教師の知名度	.26	-.06	.46	-.01	.28
19	教師の外見	.14	.12	.46	-.15	.26
22	実生活・将来にかかわる講義	.17	.28	.40	.06	.27
29	教室温度や換気への配慮	.01	.19	.39	.11	.20
3	愉快的脱線有り	-.10	.05	.39	.24	.22
9	学生から学ぶ態度	.28	.11	.31	.28	.27
15	学生から人生観へのインパクト	.03	.04	.18	.53	.32
5	学生の知識や常識を覆す	.08	.00	.05	.47	.23
16	親しみやすい態度	.27	.25	.35	.46	.47
2	さらに学びたい気持ちになる	.07	.01	-.09	.40	.17
24	その分野への理解が深まる	.29	.28	-.01	.30	.25
6	宿題返却にコメントをつける	.26	.25	.00	.30	.22
32	出席している学生が多い	.11	.20	.08	.29	.14
因子寄与		3.42	2.91	2.18	1.89	10.41

表2：因子分析による学生の重要度判断の視点

視点	番号	内容 (略記)	平均 (S.D.)
講義の構成技術の良否	36	多角度からの説明	4.56 (0.85)
	7	題目内容と実際内容との一致	4.36 (1.20)
	20	時間配分を考慮	4.28 (1.05)
	17	最新の学問的知識の提供	4.27 (0.94)
	23	文献資料の紹介	4.15 (1.08)
	10	学生主体の討論	3.87 (0.97)
	35	効果的な話し方	3.79 (1.06)
	11	教師の主義主張を述べる	3.78 (1.01)
	26	学生との講義外接触	3.77 (1.04)
	25	他講義との関連	3.70 (1.02)
理解しやすさへの配慮	31	熱意有り休講少ない	3.36 (1.10)
	34	私語・居眠り・遅刻に厳しい	3.34 (1.09)
	28	聞きやすくノート取りやすい	5.17 (0.83)
	13	適切で理解しやすい教材	5.15 (0.80)
	12	学生の興味を引く具体例	5.11 (0.77)
	14	単位認定の明確な方法・基準	4.79 (1.03)
	33	学生の学力にあわせた講義	4.75 (1.01)
	1	いろいろな角度からの成績	4.70 (0.76)
	18	前の講義との明確なつながり	4.64 (0.96)
	30	明確な講義目的	4.64 (0.89)
外的情報の判断	21	履修済み講義を配慮	4.45 (1.12)
	8	クラスの人数を考慮	4.40 (1.01)
	22	実生活・将来にかかわる講義	4.64 (1.12)
	4	評判の良い講義	4.56 (1.12)
	3	愉快的脱線有り	4.51 (1.00)
	29	教室温度や換気への配慮	4.50 (1.02)
	9	学生から学ぶ態度	4.32 (0.99)
学生への影響度	19	教師の外見	3.13 (1.08)
	27	教師の知名度	2.91 (1.09)
	24	その分野への理解が深まる	5.16 (0.81)
	2	さらに学びたい気持ちになる	5.07 (0.93)
	32	出席している学生が多い	4.87 (1.03)
	16	親しみやすい態度	4.83 (0.92)
	6	宿題返却にコメントをつける	4.69 (1.08)
5	学生の知識や常識を覆す	4.64 (0.93)	
15	学生の人生観へのインパクト	4.41 (1.07)	

表 3 : 学生の評価視点別にみた項目の重要度

というよりも、むしろ講義の外的な情報による評価視点があることが分かる。さらに第IV因子から読み取れる視点としては、学生自身にとってその講義がどの程度大きな影響を持っているのかということが挙げられるであろう。

2.1.2 学生にとって重要な項目

ここでは評価の視点別に学生にとって重要とされる項目を見ておこう。表3は項目を平均の高いものから順に並べ替えたものである。表中には項目内容と平均及びS.D.が表示されている。いずれの項目もS.D.は1.0前後の値を示し、平均も多くの項目で4をこえていることが分かる。したがって、こちらで準備した36個の項目のほとんどが、講義の評価にとって重要であると学生達によって判断されていることがうかがえる。なお本論文では項目が重要かどうかはその平均が4以上か否かで判断していくことにする。これは項目の重要度を1から6の離散量で判定しているためであり、結果の解釈はあくまでも相対的なものであることに注意が必要である。

視点ごとに見ていくと、まず「講義の構成技術の良否」の観点では、「36. 多角度からの説明」、「7. 題目内容と実際内容の一致」、「20. 時間配分を考慮」などの項目に関する平均が高い。その一方で、「34. 私語・居眠り・遅刻に厳しい」や「31. 熱意有り休講少ない」などの項目の平均は相対的に低くなっていることがわかる。

次に「理解しやすさへの配慮」の観点からは、「28. 聞きやすくノート取りやすい」、「13. 適切で理解しやすい教材」、「12. 学生の興味を引く具体例」などをはじめとして、すべての項目について平均が4よりも高かった。この結果は、学生達が分かりやすい講義をいかに切実に求めているのかということを示すものである。そのことは逆に、教員側が学生にとって理解しにくい講義をしてしまいがちであることを示唆するものでもあると言えよう。

また「外的情報の判断」では、「22. 実生活・将来にかかわる講義」、「4. 評判の良い講義」

などの項目の平均が高い。教員養成系の本学部の学生の「実益」に対する要望の高さがうかがわれる結果である。しかし、その一方で「19. 教師の外見」や「27. 教師の知名度」ではその平均が、それぞれ、3.13と2.91と低いものであった。学生達は外的な情報で講義の良しあしを判断する視点を持ちながらも、その視点は決して皮相的なものではないことが読み取れる。

最後の「学生への影響」の観点にまとめられた7つの項目は、その平均がすべて4以上であり、いずれも学生にとって重要なものとなっている。その中でも「24. その分野への理解が深まる」、「2. さらに学びたい気持ちになる」の平均は5以上となっている。その裏には、学生にとって「ある分野への理解が深まらない」、あるいは「深く学ぼうという気にはならない」内容の講義が多い現実があるのかもしれない。

2.1.3 学生の自由記述からみた講義評価の重要事項

学生に対しておこなった自由記述による質問では、のべ141件の回答が寄せられた。それらを抜粋整理したものが表4である。各記述は内容ごとに「講義の選択」、「講義の技術」、「講義のレベル」、「講義の内容」、「成績評価」、「講義時間」、「教師の姿勢」に大まかに分類した。詳しくは表4を参照されたいが、その中でも特に多くの学生が指摘していたのは「講義の技術」と「講義の内容」に関するものである。

まず「講義の技術」に関しては、板書の仕方や話し方の大幅な改善を求める意見が、表4に掲げたものを含めて計24件あった。学問的な内容そのものではなく、いわば外的な要因によって伝えるべき内容が学生にうまく伝わっていない、もしくは理解されていないとすれば、これは教育上大きな損失であると言わざるを得ない。実習などで学生に板書や話し方の指導をする機会の多い教育学部の教員としても、考えさせられる結果ではないだろうか。

次に「講義の内容」で目立つのは、「実用的な知識が知りたい」という要望である。この理由

<p>(講義の選択) 講義の選択肢を多くして欲しい。 聴講したくてもできない授業がどうしても出てきてしまう。 単位合わせのためのような授業を取らなければならないようなカリキュラムはやめるべきだと思う。</p>
<p>(講義の技術) 大切なことを黒板にも書かずに早口で話す授業では、ノートも取れずに後で見返すことが難しい。 また、先生が一人で理解しているだけで、学生には何を言いたいのか分からない授業には出る気がなくなる。話の前後のつながりや言いたいことが何なのか分かるようにして欲しい。 板書が、むちゃくちゃな授業がある。改善した方が良いと思う。 「大学の教師」を先生本人が「研究者」として位置付けているのか「教えることのプロ」として位置付けているのかよく分かりませんが、学生としては「話の内容が理解できる」(声の大小、黒板の字の大きさ)ことは最低限だと思います。 ノートを取っている学生の事を考えないで、どんどん先に進む先生がいるが、それは理解できない。 大講義室での授業は、教授から遠く離れ、黒板からも遠くなりがちなので緊張感がなくなり、あまり熱心に授業を聞こうと思わなくなる。 発音、発声、声力(聞き取りやすい)、黒板の字(見やすい)、話のペース。 学生の言高な私語がうるさい時もある。これだけは注意するなり、なんとかして欲しい。</p>
<p>(講義のレベル) 専門用語ばかり使って、頭のいたくなるような講義はやめて欲しい。もっとわかりやすく、それらを説明して欲しい。 教師が学生の学力のレベルを知っていること。 講義の内容が難しいのは分かるけれども、明らかにどうせ説明したって分からないというのを前提にして黒板を向いてよく分からないことを黙々と書くような授業が一番嫌いだ。せめて努力をすれば分かる授業にして欲しい。</p>
<p>(講義の内容) 教師がなぜ自分の受け持つ講義を開講したのか明らかにすること。 学生に興味を持たせるような講義内容になるように教師もいくらか工夫して欲しい。おもしろくない講義を90分も聴いて苦痛に感じている学生がいるのも現状である。 教育学部の場合ですが、現場に出て役立つものであること。 学生の意見や思想を無視、または教授の考え方を押しつけるのではなく、広い視野を培うこと。 教官の自己満足のため(知識の押しつけ)の講義が多くてつまらない。 教授だけでなく、専門職の人達の生の声が聞けるような講義は、いつもとは違った感じを受ける。 確かに大学という場所は高い水準の学問研究の場であるが、実社会に役立つ、ある教授のマニアックな世界を表現するだけではないかなと思う。もう少し実用的なものを!!</p>
<p>(成績評価) 大きいテスト1回で判断するのではなく、平常点(出席、テスト、発表)で評価するのもいいと思う。 講義に出席していてもテストが難しすぎることもある。(内容が高度すぎる) 評価の仕方を前もって学生に知らせること。(例えば、レポートのみで評価するなど)</p>
<p>(講義時間) 1週間に1回でそれも比較的長い時間(90分)を取るのは、身につけるにはちとつらい。(前回の内容を忘れやすく。長い時間で集中力がなくなる。)</p>
<p>(教師の姿勢) 教師の役割を十分認識したうえで、自分の研究と講義とを両立させて欲しい。 教師が熱意をもって説明してくれないと、学生もだらけてしまうと思います。 先生が生徒にものを教える気持ちが大切、例えば、先生の話をしている内容を教室内で、その先生しか理解していないような授業はダメ(専門的すぎるなど)。 講義内容や研究内容について学生にあわせるなど、別にしなくてもよいが、学生に対する「思いやり」の精神をもう少し持って欲しい。人間味の感じられる教官が本当に少ない。</p>

表4：学生の自由記述の内容(抜粋)

として、今後も予想される就職難はさておき、卒業後すぐに一人の教師として全責任をもって学級をまかされる本学部学生の立場が挙げられるであろう。もうひとつは、講義という形式上ある程度しかたないことであるが、様々な専門的知識を抽象的なレベルのまま教え込んでしまうという教員側の姿勢に問題があるのかもしれない。

2.1.4 学生と教師とのあいだで重要度が異なる項目

学生と教師との間で、講義評価項目の、重要性についての認識のずれを示したのが図1である。この図では各項目に関する学生の平均を縦軸にとり、教師の平均を横軸にとって、項目をプロットしてある。したがって図の対角線上に近ければ近いほど、その項目の重要度に関する学生と教師の認識の隔たりが少ないといえる。一方、対角線上から離れて、たとえば図の左上のブロックに入ったものは、学生にとっては重

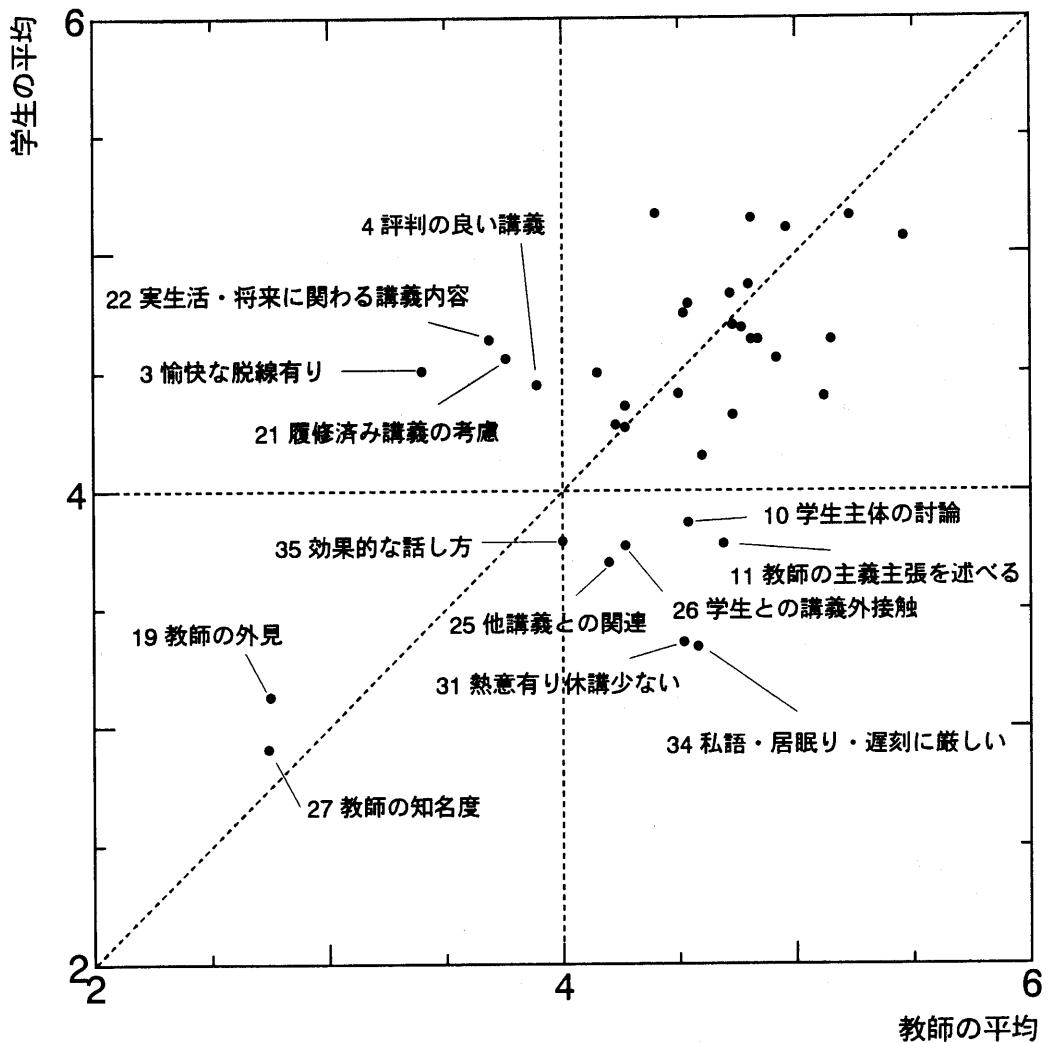


図1 評価項目の重要度に関する学生と教師の認識の異同

要なものでも、教師にとっては重要ではない項目と考えることができる。逆に、右下のブロックに入ったものは学生にとってさほど大切ではなく、教師にとっては大切であると判断された項目である。

さて学生にとって重要で教師にとってはそうでなかった項目を挙げると、「3. 愉快的脱線あり」、「4. 評判の良い講義」、「21. 履修済み講義の考慮」、「22. 実生活・将来に関わる講義内容」の4項目となる。逆に学生には重要ではなくとも教師にとっては重要である項目には「10. 学生主体の討論」、「11. 教師の主義主張を述べる」、「25. 他講義との関連」、「26. 学生との講義外接触」、「31. 熱意有り休講少ない」、「34. 私語・居眠り・遅刻に厳しい」、「35. 効果的な話し方」の7項目となる。また学生・教師ともにさして重要ではないと判断した項目は「19. 教師の外見」、「27. 教師の知名度」の2つの項目であった。これ以外の23項目については学生・教師とも講義評価にとって重要であると判断していることになる。

2.2 教師の自由記述からみた講義評価

ここでは教師に対して行った自由記述形式による質問結果をまとめておく。質問は「1) 大学の講義評価に関する意見を記入して下さい」、「2) 今の大学生の学習態度についての感想を記入して下さい」、「3) 今の大学教師の講義への取り組み方や学生に対する態度についての感想を記入して下さい」、「4) 大学の講義にとって重要と思われるものがあれば記入して下さい」の4項目であった。自由記述の内容からの分析や考察はあえてしていない。また、回答者のプライバシー保護のため、個人的な情報が含まれているものなどは除外しておいた。さらに回収率が26%であったため、本学部全体の動向が反映されていないことなどにも注意が必要であろう。

2.2.1 大学の講義評価に関する意見

大学に講義評価を導入することに関しての意見を賛成・条件つき賛成・反対の3つのカテゴ

リーに分類すると以下のようになる。

賛成意見

- ・是非必要。学生にも是非評価させて、教官はその評価を大いに参考にして、講義の内容と方法をよりよくしていかなければならない。
- ・賛成する。講義の改善に役立つと思う。
- ・大学の講義は教官のためもあるがそれ以上に学生のためにあるのだから、改善を常に行っていく必要がある。
- ・自分のやったことに対する評価が欲しい。単にテストの結果のみでなく学生がどのように受け止めているか、などについて。もちろん、まじめに評価してもらえらば。
- ・何年も論文を書かないで50年以上も前の学説を教えている教員も多いから反省を促すために必要。
- ・大学教育では、講義に対する評価が行われ、それを教官がどう受けとめるかといったことが日常的に行われる方が理想的なのでしょう。
- ・学生の講義に対する評価も含め、きちんとした評価をし、自己の講義の質の向上に努めるべきである。

条件付きの賛成意見

- ・ノリのいい、ウケのいい講義はある面必要だと思うが、その内容（質）こそ大事である。それを単位の取りやすさや表面的な面白さを中心に考えている学生に見わけられるか不安である。
- ・評価が成績や単なる人気に関係なく、正確に行われるならば賛成する。しかし客観的に言って受講人数や休講数などで評価するのは問題である。
- ・よい試みだと思う。ただ各項目の文脈について、日本の高等教育の現状等から考察の必要あり。
- ・条件付きで賛成。条件というのは、評価の結果を給料に反映させないこと。評価の結果

果から講義の改善を図るのは、あくまでも教員の自主性に任せられるべきなので。強制によって創造は生まれない。

- ・原則的に賛成する。なぜなら、学生のニーズも含めて講義内容、方法を改善するのに役立つと思われるから。ただし、単なる講義のランク付けに使用されるのは、本来の趣旨と異なるし、講義の多様性から考えて不可能だと思う。評価方法や、どの程度参考にするのが検討課題だと思う。
- ・当然ですが、評価の基準を何に求めるかという点がかつとも困難、かつ重要な点と考えます。
- ・教師個人が工夫しているなら、講義評価は不要。ただし、自分の講義の長所、短所を見る一つの資料としてなら大いに活用できると思う。

反対意見

- ・反対。その理由は、大学の教員はホントはとてまナイーブで傷つきやすい人が多いから。
- ・他者による評価が必要だとは思わない。
- ・あくまでも教員自身による自己評価を基本とすべきである。望ましい評価方法を一律に定めることは不可能ではないかと思われる。現時点においては、教官が個別に行っている（であろう）試みを紹介・交流することが必要であろう。
- ・反対である。自らの「講義」を日々新たに改善する必要のあることは当然である。しかし、それが「講義評価」となると、また、別問題である。まず、この別であることを理解することが大切であろう。「講義評価」の概念があいまいである。したがって、その目的・方法を定めることが困難である。「評価」には基準が必要である。それはどのようにして定めることができるのか。「評価」が、学問の自由を阻害しないという保障はない。「評価」は、まさに、各自が自分で行うべきものである。他からの「評価」がなければ講義の改善が望めないような教師は研究者としても失格ではないか。そもそも「講義評価」というとき、「講義」と「研究」との関わりをどのように考えているのか。「講義」内容が客観的に（例えば、一定の教科書のように）定められるものなのか。大学とは何か。大学人にとって教育とは何か。

2.2.2 今の大学生の学習態度についての感想

- ・世の中全体が、他から与えられ満たされているので、学生の態度も受動的で問題意識に欠けている。マニュアル社会につかりきっている。「講義評価」などという発想もそこにあるのではないか。受動社会の産物？
- ・楽に単位がとれる講義を聴講しようとする傾向は、従来から見られるが、3年生になり専門科目に興味を持ち始めると真剣になる学生が増えてくる。新潟大学の大学生の勉強への態度という意味で単位さえ取ればいい。役に立たないようなことには時間を割かない。勉強は何かを得るための手段として考えているように見える。知的興奮を知らないのではないか。
- ・単位数の上で追いまわられて、何を勉強するのかという問題意識を深めることができないのではないかと思う。
- ・与えられたものはうまくこなすが、大きなものにぶつかる意欲は不足。(私の講義に関しては)まじめです(1限のため眠っているものもありますが)。それは、選択科目ですので興味のある学生しか履修しないためと思います。
- ・良好。
- ・おとなしい。ある意味でやりやすい。つまらない。まじめである。「がんばっているネ」というのが、ほめ言葉になってしまう。
- ・昔の大学生というと自分のことしか分らない。自分と比較してなら、さほど変化はないと思う。興味のある講義なら熱心に聞

くし、そうでないなら手を抜くのは当然ではないかと考える。

- ・卒業免許だけのための授業への関わり方は、大部分は問題（話し）にならないが、専門科目の演習や卒業論文への取り組みには、大部分、誠意がこもっている。
- ・教育の学生はまじめ。必要以上のことはやらないのが不満。小中学生ではないのだから黒板に書いたものだけをノートしては、話もつたない。
- ・今も昔もそれほど変わらないと思うが、変わった点は授業料（90分=1,500円）が高くなったにもかかわらず、概して学生はオトナシイ点。消費者感覚が希薄。
- ・とにかく私語が多い。これは最初の授業からである。驚くべきことである。
- ・教官の工夫と熱意によって、学生の学習態度は真剣になる。学生と教官の interaction が重要。
- ・参加型の授業のときは積極的である。90分の講義で、説明だけであると、グラける。
- ・一般化はできないが、よいとはいえない。但し、これは学生のための責任でもない。入学当初からの大学側の教育方法の枠組みにも大きな問題がある。
- ・遅刻に対して恐ろしいほど感覚が鈍化している。
- ・批判的に学ぶ姿勢が弱いと思う。
- ・専門科目については極めて熱心に受講していると思う。
- ・受け身で消極的
- ・(短所) 私語が目立つ場合がある。宿題を与えても深く考慮していない。(長所) 出席をとると出席率がいい。
- ・学習態度や意欲のばらつきが多いような気がする。ある程度以上の意欲を持つ学生のニーズを満たせるように講義しているつもりだ。それらが低レベルのものまで十分フォローするのは大学教育ではないと思う。
- ・受動的、受け身的な学生が多いように思う。

質問を求めても少ない。もっとも書かせる
と多くの意見が出る。

2.2.3 大学教師の講義への取り組み方や学生 に対する態度についての感想

- ・著しい個人差があると想像されるが情報がないので何とも言えない。
- ・自分も含めて、いろいろと忙しすぎて、じっくりと講義に取り組めていない。また、昇格などの業績評価の対象が研究のみであり、教育への努力が何ら評価されないため意欲が湧かないのかも知れない。(本来、それではいけないと思うが、教員も人間です。)教師と学生の双方に熱意がないといい講義は成り立たない。ある程度真剣だと思う。
- ・現在よりも詳しい講義内容の紹介が必要であろう。評価基準も可能な限り明確にすべきだと思う。また、関連する講義については、担当者間の意見交流があつてよいと思う。
- ・双方とも意識が甘いと思う。何らかの形で(全学体制で)取組みに対する点検と反省が必要ではないか。
- ・真摯な研究者は、同じに真摯な真理の語り手でもある。良い講義をする大学人が、必ずしも良き教育者であるとは限らない。そもそも「良き講義」とは何なのか説明されたい。
- ・講義科目が自分の専門(狭い範囲の)以外のものもあり、適切な内容になっていない case が少なからずある(自分自身も含めて)ように思う。そのため、わかりにくい授業になっているのではないかと思う。専門だとどうやったら良いか、いくつも方法が考えられるが。
- ・他の先生のことはわからない。工夫をして興味を引く授業をする先生もいれば、いわゆる教科書を読むだけの先生もいるであろう。教員側も学生側も相互に不信感があるのではないか。

- ・看板（講義題目や免許法上の科目名）と内容がズレている面も見られます。ある程度の企業努力（内容をわかりやすく話す、興味あるテーマを科学する、など）は必要だと思います。
- ・大学教師—この人たちの世代によって、その姿勢にはかなりの差がある。
- ・他の教師の講義を見ていろいろフランクに建設的なディスカッションができれば状況はずいぶんと改善できるのでしょうか。
- ・大学の教師に講義が毎年同じだったり、いくつか種類の異なるハズの講義がキンタロー鮎という方もいる。が、割に一生けんめいの人が多いと思う。
- ・小中教員のように他の教師の講義を見る機会（Faculty Development）が、制度化されていないのが、教師側の問題。

2.2.4 大学の講義にとって重要なもの

- ・教官は常に学生による自分の講義の評価を厳しく受け止め、自分の講義を改善し、講義を生き生きとさせなければならない。学生の評価能力を問題視している学部もあると聞かすが、学生との interacton によって学生の評価能力を高めることが教官の役目ではないだろうか。
- ・たいへん興味あるテーマです。講義の質を高めるには、基本的に大学全体のカリキュラムと自己点検の方法を改善する必要があると思います。特に、入学時に卒業までの見通しと希望の持てる講義を組織することが重要ではないでしょうか。研究と直接の関係はないかもしれませんが図書館の地下へ4年次にならないと入室できないのも大変ネックとなっております。それでは、新大生は勉強しなくてもよいと言っているのと同じではないでしょうか？
- ・いろいろとコメントを書きましたが、「よい」とか「悪い」というタームは、大変に抽象性の高い概念（個人によって正反対もある）で、それを数量化するのはとても難しいと

思います。学ぶ側の意識によって、「よし」「悪し」は変わるものと考えます。

- ・視聴覚設備が整っているか。講義時間の長さが適切かどうか。担当者にとって講義の数が適切か、週4科目も担当すると準備がキツイ（現場の叫び声）。
- ・まず、互いに熱意を持つこと。次に相手の熱意を引き出す行動。これらのためのバイタリティーと時間的配慮（保証？）
- ・学生の学力に対する教師の考え方。適正な受講者数。学生の意識（学生であることについての）。
- ・正直に言って、調査員は、大学の「講義」というものをどのように考えているか。アンケートに答えながら腹だたしさを感じた。それは、高校教育のそれと同じなのか、違うのか。大学の研究教育というものを、しっかり勉強してから「評価」を問題にして欲しい。答えるのではなかった。!!
- ・学生が平気で遅刻する。ジュースを持ち込む（さらにこれを講義中に飲む）ことは是非ともやめるべきである。教師も遅刻すべきではない。（たいへん多いと思う。）
- ・こういう調査をやらなければならない時代になったことは、とても息苦しく残念に思う。もっとも重要なのは「休講」することだと思います。「休講」こそ学生にも教官にも心底喜ばれる方法なのです。
- ・シラバスを作成して、配布する。学生参加型の講義を工夫するなど。「21、すでに履修した講義との関連」、「25、他の講義との関連」については考慮するに超したことはないが、教官相互の合意がないと「考慮」することは難しいであろう。
- ・難しいことかも知れませんが、学生による講義評価を検討する必要があると思いますね。やってもやらなくても学生の知識や態度、力量に変化がないものはできるだけ削除していくような改善が必要。
- ・私は、大学にとって、あるいは、大学教官にとって講義はとても重要だと思う。まず、

質の高い講義ができるように、大学教官の研究、教育生活に余裕を持たせることが必要であろう。また、「質の高い講義」についても評価の視点は複数あるはずだ。単一の評価基準では教育の活性化は望めない。また、学生に対しては、事前に講義に関する情報を十分に与えて、成績評価には容易な妥協をするべきでないと思う。

- ・学問の最先端に教員自身が立ち向かっていること。単に授業の方法の問題ではない。

3 まとめ

新潟大学教育学部において学生及び教員に対して行った、学生による講義評価に関する調査結果の分析を本研究では試みた。

その結果、学生から見た場合、1)講義を組み立てる技術の適否、2)講義内容が理解されやすいようにどの程度配慮しているか、3)講義の評判などの外的な情報の利用、4)学生自身への影響の大きさの4つの講義評価の視点の存在が指摘できた。また視点ごとに学生が重要であると判断した項目には、それぞれ、「多角度からの説明」、「聞きやすくノートがとりやすい」、「実生活・将来にかかわる講義」、「その分野への理解が深まる」などがあつた。

一方、学生の自由記述では、教師の板書の仕方や話し方の大幅な改善を求める意見や実用的な知識を得たいという要望が多いのが特徴的であつた。また、学生にとっては重要で教師にとっては重要ではない項目として、「履修済みの講義

の考慮」、「評判の良い講義」などが指摘でき、その逆の項目としては、「教師の主義主張を述べる」、「学生との講義外接触」などが指摘できた。

最後に教師の自由記述から得た講義評価に関する様々な意見を整理した。これは学生による講義評価を導入するか否か、そして仮に導入するとしたらどのような点に留意すべきかについての議論をする際の一つの資料となるものであろう。

参考文献

- [1] 阿部桂子 (1987) 学生による講義評価と予想成績および実際の成績との関係 *Niigata Educational Psychologist*, Vol.4, 1-2.
- [2] Burdsal, C. A. and Bardo, J.W. (1986) Measuring student's perceptions of teaching: Dimensions of evaluation, *Educational and Psychological Measurement*, **46**, 63-79.
- [3] 片岡徳雄・喜多村和之編 (1989) 大学授業の研究 玉川大学出版部
- [4] 織田揮準 (1983) 学生による「教育心理学」授業評価 三重大学教育工学センター研究報告第3号 21-34.
- [5] 織田揮準 (1984) 学生による授業評価—授業改善の研究— 三重大学教育工学センター研究報告 第4号 31-52.
- [6] 臨時教育審議会 (1987) 教育改革に関する第四次答申 大蔵省印刷局